



松永正津氏作  
ヒラマサ(1m60cm・39.75kg)  
平成26(2014)年2月20日

## 大阪で磨いた技法を世界へ発信 「アート魚拓」の第一人者・松永正津氏

釣りの周辺にはさまざまな文化がある。そのひとつ「魚拓」は、江戸時代に庄内藩(山形県鶴岡市)で発祥したといわれる日本の伝統文化である。天保10(1839)年、藩主の酒井忠発(ただあき)が、江戸住まいの折に錦糸堀(現在の東京都墨田区錦糸町)で釣り上げた39センチの鮎の拓が最古とされ、鶴岡郷土資料館に保存されている。藩では武士としての心身の鍛錬に磯釣りが奨励され、大物を討ち取った敵将の首に見立て、拓を採って藩主に差し出したといわれている。

魚拓には、魚の上に乘せた布または和紙の上からタンポで墨や絵の具をつける「間接法」と、魚体にじかに墨や絵の具を塗って写し取る「直接法」がある。忠発の鮎の拓は直接法で、松永正津氏(大阪市)はその技法を発展させ、芸術の域に高めた「アート魚拓」の第一人者である。

「魚の色に合わせて色を付けるのではなく、自分が思う色で魚の上に絵を描き、それを写し取る感覚。だからカラー(色付き)魚拓ではなく、意図して創作したアート魚拓なのです」

制作にあたっては、魚に塗った絵の具が乾かないうちに和紙に写さなくてはならない。その時間は魚の大きさに関係なく30分前後、気温や湿度も影響する。もちろん後で加筆したり、再度魚に色を塗って拓を採り直すようなことは一切せず、最後に筆を入れるのは目玉だけ。真剣勝負だからこそ、制作に入るまでの準備を入念に行い、前日から心身の調子を整え、制作に入れば一気呵成の集中力が必要だという。そうして魚と対峙する姿は、まさに「魚拓道」というにふさわしく、釣行を戦に喩えた武士の心髄にもつながるものである。

松永氏が直接法魚拓をはじめたのは昭和36



(1961)年。少年時代から絵画に親しみ、後年、日本画家・満田天民(1905～85)にも師事した



松永氏のアート魚拓には、静謐で凜とした日本画の佇まいが漂う。予期せぬ色のかすれや滲みにも“味わい”を見出し、背景には何も描かない。その空白こそが、魚が生きている場所すなわち“水中”の表現なのである。絵画ではない、新たな魚拓の世界を追求した結果の境地だという。

身の締まった新鮮な魚ほど、仕上がりが良い。関西に朝廷がおかれていた古代、天皇に魚介類を献上していたのは鳥羽、越前、そして茅渟(ちぬ)の海の古称をもつ大阪湾で、関西は好漁場に恵まれた「御食国(みけつくに)」と呼ばれていた。つねに新鮮な魚が手に入る関西・大阪なればこそ、魚拓文化が一層発展したのであろう。

50年以上魚拓に携わってきた松永氏は、日本各地で展覧会や講習会を開き、昨年の第66回全国カレンダー展では、作品を掲載した『2015シマノ魚拓カレンダー』が経済産業省商務情報政策局長賞と金賞を受賞した。著書は中国でも出版され、今年2月には、中国・天津市で開催の「碧海2016年春季フィッシングショー・第4回中外魚拓展」に参加。開会の挨拶や実演、トークイベントなどを行った。松永氏は、日本発祥の魚拓文化を世界に広めるべく、中国や韓国などアジア各地での活動も精力的に行っている。

松永正津(まつなが まさつ)氏  
東洋魚拓 拓正会会長  
東方龍脈魚拓芸術学会顧問(中国)  
天陽会顧問  
歴、元展美術協会理事審査員(日本画)